

子育ての悩みが出産行動に与える影響

—JGSS-2009/2013 ライフコース・パネル調査を用いた分析 (2)—

日本学術振興会（京都大学） 伊達平和

1. 問題の所在

我が国の合計特殊出生率は2006年以降、ゆるやかに上昇を続けているものの、依然として少子化の傾向は続いている。このような中で出産行動については数多くの分析が行われているが、主に経済的な要因、夫婦の家事分担や育児休暇制度に着目した分析がなされてきた。その一方で、夫婦関係に関する満足度やストレスといった主観的な側面についての分析は、樋口・深掘(2011)や石井(2013)を除いて乏しいのが現状である。以上をふまえ、本報告では子育ての悩みやその他の主観的な意識と出産行動の関連について明らかにする。

2. データ

使用するデータはJGSS-2009/2013 ライフコース・パネル調査である。このデータは2009年と2013年に行われた縦断調査であり、子育ての悩みや教育費に関する意識が含まれるため、出産行動の動態的な変化と主観的な意識の関連について詳細な分析が可能である。まずクロス表によって、この4年間の出産行動と主観的な意識との関連について記述的な分析を行う。次に先行研究をふまえ、経済的要因や家族構成、夫婦の働き方などを統制した多変量解析を行う。

3. 結果

本分析の結果の一部を示す。図1は、この4年間で子どもが増えた人の割合について、2009年調査時点における子育ての悩みの有無別に示したものである。「子どもの友達関係」「子どもの教育費」「子どもの学業成績」に悩みがあると、無い場合に比べて子どもが増えた人が少なく、その中でも「子どもの学業成績」で差が大きい。このように、子育ての悩みは出産行動と関連するが、悩みの種類によって異なっている。当日は多変量解析の結果も示し、子育ての悩みやその他の主観的な意識が出産行動に及ぼす影響について論じる。

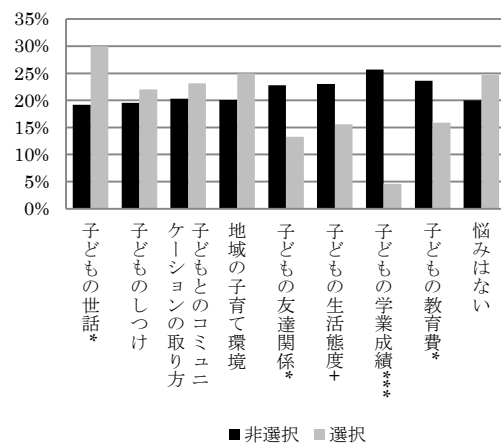


図1. 子育ての悩みの有無別にみた子どもが増えた人の割合
(χ^2 検定: +:p<0.01, *:p<0.05, **:p<0.01, ***:p<0.001)

<付記>

日本版 General Social Survey ライフコース調査 (JGSS-2009LCS) は、大阪商業大学 JGSS 研究センター (文部科学大臣認定日本版総合社会調査研究拠点) が実施している研究プロジェクトである。JGSS-2013LCS(Wave2)は、大阪商業大学 JGSS 研究センターと京都大学教育学研究科・教育社会学講座が共同で実施している研究プロジェクトである。

参考文献

- 樋口美雄・深掘遼太郎, 2011, 「女性の幸福度・満足度は出産行動に影響をあたえるのか—「消費生活に関するパネル調査」を用いた第1子・第2子出産行動の分析—」 JOINT RESEARCH CENTER FOR PANEL STUDIES DISCUSSION PAPER SERIES DP2011-002.
- 石井太, 2013, 「出生動向基本調査と国民生活基礎調査とのデータマッチングを用いた子ども数の分析」, 人口問題研究, 69-2, pp53-73.